

昭和南海地震の被災現場で防疫活動に取り組む女性たちを収めた2枚の写真がある。高知県立大の前身で、終戦直前の1945年8月に開校した県立女子医学

専門学校(女子医専)の1期生たち。医業を志す学生として使命感に駆られて活動したという、当時学生だった2人の女性に話を聞いた。(海路佳孝)

# 女子医専1期生防疫活動

女子医専1期生の卒業アルバムにある写真で「急に使命感が湧いた」と振り返る。高知市の下知地区で女子医専の学生たちが腸チフスの予防注射を行っている光景が写っている。この地区(90)は同市九反田は多くの家屋が倒壊し、津波の浸水被害に、自宅2階(友人と)に遭った。環境悪化を一緒に机に向かっていた。女子医専の学生の一部が駆り出された。突然、家がきしみ始め、活動に参加した須賀つばのインクがこぼれ、羊子さん(87)は「現場で注射している。急いで家の外を打ったことばありま

下司孝麿氏(後に下司。国や自治体の支援病院を開院)の引率に頼るばかりでなく、5、6人の学生と「自分たちで何とかせよ」とも徒歩で土佐市宇佐町に向かった。しかし、宇佐の町は津波で家屋の多くが流失していた。避難したためなのか、人の姿ほとんどなかったといふ。松崎さんは「先生は『僕らの手に負える状態やない』と。活動は断念せざるを得ませんでした」と振り返る。

## 昭和南海地震の県内被災地

昭和南海地震の被災現場で防疫活動に取り組む女性たち(写真はいずれも高知市の下知地区=県立女子医学専門学校1期生の卒業アルバムより)

## 卒業アルバムに写真

昭和南海地震の被災現場で防疫活動に取り組む女性たち(写真はいずれも高知市の下知地区=県立女子医学専門学校1期生の卒業アルバムより)



腸チフスの予防活動を行う県立女子医学専門学校の学生たち(写真はいずれも高知市の下知地区=県立女子医学専門学校1期生の卒業アルバムより)

